Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-21

意図の不明確な対人挑発場面と対人疎外場面の作成に関する予備的研究

相澤，直樹

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,4(2):107-122

(Issue Date)
2011-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81002989

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002989

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第 4 巻第 2 号　2011
Bulletin of the Graduate School of Human Development and Environment Kobe University, Vol.4 No.2 2011

意図の不明確な対人挑発場面と対人疎外場面の作成に関する予備的研究

A preliminary study on the construction of intent-ambiguous provoking situations and estranging situations

相澤　直樹*
Naoki AIZAWA *

要約：本研究では，Dodge ら（Dodge, 1980; Crick & Dodge, 1994）による対人挑発場面における敵意帰属研究に対比し，対人疎外場面における嫌悪判断の概念を提起し，場面想定法によりそれぞれの個人差を引き出す手法を開発する準備段階として，対人挑発場面と対人疎外場面を作成する予備的な研究をおこなった。一般大学生と大学院生から対人葛藤場面として 27 場面を収集し，内容面から 11 場面を採用することとした。それらに意図を問う質問項目と情緒反応としての怒りと嫌悪を問う質問項目を添付し，妥当性検討尺度（Big Five 尺度，BAQ，自意識尺度）とともに一般大学生に実施した。各場面に対する評定平均値が極端な 2 場面を削除し，対人挑発場面 3 場面と対人疎外場面 2 場面に対する項目得点と妥当性尺度との相関を検討した。その結果，前者では BAQ との関連を中心に妥当な値がえられたが，対人疎外場面では自意識尺度との間に妥当な相関関係が得られたものは 1 場面にとどまり，他の 1 場面では仮説に一致する関連がみられなかった。以上の結果について対人挑発場面と対人疎外場面の性質の差異，ならびに，意図評定質問項目の表現の妥当性の観点から検討を加えた。

キーワード：敵意帰属，対人挑発場面，場面想定法，対人関係，青年期

問題と目的

対人場面における認知の様式は，その後の気分の状態や行動に重大な影響をもたらすものと考えられる。この点で近年顕著な研究成果を報告しているのが Dodge ら（Dodge, 1980; Crick & Dodge, 1994）による「敵意帰属バイアス（hostile attributional biases）」の研究である。敵意帰属バイアスとは，攻撃的な児童に特徴的にみられる対人場面の解釈の様式であり，他者からの何らかの阻害を被る対人挑発場面（provoking situations）においてそれを相手の敵意に帰属しやすい傾向を指す。特に，攻撃的な児童は，相手の意図が曖昧な場合にも相手の意図に帰属し，頻繁な報復的攻撃に向かいやすく，また，他者からも敵意的な行動をとると認知されやすいことから，それらが悪循環となって社会的な孤立や不適応に陥るものとされる（Dodge, 1980）。

Dodge らにはじまる敵意帰属バイアス仮説は，膨大な実験研究や調査研究を通じて頑健な支持を得ている（Akhtar & Bradley, 1991; Orobio de Castro, Veerman, Koops, Bosch, & Monshouwer, 2002）。ただし，対人関係における葛藤場面としては対人挑発場面のみが取り上げられており，また，他者の意図としても敵意に主な注意が向けられている。しかしながら，対人関係で問題になるのは必ずしも対人挑発場面に限られるわけではなく，また，それに応じて，他者について敵意以外にも様々な意図が想定されうる。たとえば，次のような対人場面，ならびに，他者の意図の認知もその後の気分の状態や行動傾向に重大な影響をもたらすものと考えられる。

私たちは，日常生活の中で何らかのかたちで他者との結びつきが断たれるような意味合いを含む場面にしばしば出会う。たとえば，相手に声をかけたにもかかわらず返事が返ってこなかったり，待ち合わせの時間になっても約束の相手が現われなかったり，電車やバスの座席に座った際に隣の人が席を立ってしまったりなどである（以下，そのよう場面を「対人疎外場面」と呼ぶ）。これらの場面は日常的にごくありふれたものであり，単なる偶然や何らかの実際的な理由によるものと解釈するならば，何ら情緒的な変化も行動上の動揺も生じないであろう。しかし，「相手が自分を嫌って」，ないしは，「相手が自分を避けて」そのようなことをしたと解釈するならば，少なからぬ気分の悪化と行動の困難をもたらすものと予想される（以下，このような認知の様式を嫌悪判断と呼ぶ）。[1] たとえば，気分的な落ち込みや不安感の高まり，回避的な行動や対人場面からの引き下がりなどに結びつきやすいと考えられる。

以上と同様の問題を扱う研究としては Downey ら（Downey & Feldman, 1996; Romero-Canyas, Anderson, Reddy, & Downey, 2009）による「拒否過敏性（rejection sensitivity）」があげられる。Downey らは，従来多くの研究により発達初期における被拒絶体験がその後の対人関係に影響を及ぼすことが論じられてきたことに基づき，「拒否されるのではないかと予期し，ちょっとしたことで拒否されたと受け取り，拒否に過剰に反応する認知情動処理傾向（cognitive-affective processing disposition）」として拒否過敏性を概念化した。拒否過敏性が高い人は，拒否される可能性がある対人場面を回避する傾向にあるが，それが不可能な場合にはすぐに拒絶されたと感じ取り，敵意的な行動や引きこもり，抑うつ，ないしは，拒絶されないようにがむしゃらな努力を示す。そして，対人関係を実際に悪化させやすいとされる（Romero-Canyas et al., 2009）。

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

（2010年9月30日　受付
2011年1月 7 日　受理）

Downey らは，上記の概念化に基づき拒否過敏性の程度を測定する質問紙尺度（Rejection Sensitivity Questionnaire：RSQ）を作成している（Downey & Feldman, 1996）。

以上の拒否過敏性は，ここで問題としている嫌悪判断に極めて近似する概念であるといえる。特に「ちょっとしたことで拒否されたと受け取る」とされる部分についてはほぼ同一であるとみなせる。ただし，詳細にみると，対象となる人物として親密な他者（両親や恋人）が重視されている点，また，上記の過程の中で特に拒否に対する予期的な不安を重視しており，RSQ も実際の対人場面における認知ではなく予期不安の程度を測定する体裁をとっている点に違いが見られる。以上のことから，本研究における主題は，広義でみれば拒否過敏性の中に含まれるものと思われるが，問題とする対人関係や主眼を置く認知の過程が異なるものと考えられる。

以上のように見ると，いまだ対人疎外場面における嫌悪判断に関してはほとんど詳細な研究がなされていない。しかしながら，この体験の様式は，対人関係における情緒反応や行動に重大な影響を与えるものであり，研究の必要性を有する問題である。

Dodge らを中心とする敵意帰属バイアスの研究では，対象者に何らかの媒体を通じて仮説的な対人挑発場面を提示し，それに対する認知と体験を回答させる「場面想定法（hypothetical situation method）」という手法が用いられ，その有効性が示されている（Orobio de Castro et al., 2002）。 本研究においても同様の手法を用いて研究することが可能であると考えられる。しかしながら対人疎外場面に関しては，どのような場面設定が適切であるのかに関する先行知見がほとんど蓄積されていない。さらに，そもそも対人疎外場面は，対人挑発場面と類似した性質をもつことが想定されるため，両者を弁別可能なものとして構成しうるかどうかも明らかではない。対人挑発場面に関してはすでにいくつかの研究で作成されており，一部は海外の研究において心理測定尺度としても報告されている（Epps & Kendall, 1995; Homant & Kennedy, 2003; Tremblay & Belchevski, 2004; Combs, Penn, Wicher, & Waldheter, 2007）。しかしながら，場面想定法ではかなり具体的で詳細な場面設定が必要となるため，それぞれの社会文化的背景を色濃く反映したものとなっており，それをそのまま日本の青年男女に実施することは妥当ではないと考えられる。また，対人疎外場面との弁別性を考慮した場合，対人挑発場面についても新たな場面作成の必要性がある。

以上のことを踏まえて，本研究では新たに対人挑発場面と対人疎外場面を作成するための予備的な調査研究をおこなうこととした。まず，一般大学生，大学院生の協力のもとさまざまな対人葛藤場面を収集し，調査に使用可能な場面をいくつか作成した。さらに，それぞれの場面について相手の意図を想定する程度と情緒反応（怒りと嫌悪）を測定する質問項目を付し，妥当性を検討する尺度とともに一般青年男女に実施した。[ii]

Table 1 場面想定法に用いられた各場面の概要

分類	略称	内容の概略
挑発	衝突	繁華街を歩いている時，見知らぬ男性に肩をぶつけられ倒れそうになる
疎外	電車	電車内で座席に座ると，隣の同世代の乗客が席を立って隣の車両に移っていく
疎外	宣伝	街中を友人と歩いている時，宣伝用のティッシュ・ペーパーを自分だけもらえない
挑発	タクシー	雨の中タクシーを止めようと手を挙げるが，停車することなく過ぎ去っていく
挑発	灯り	自分がいるにもかかわらず，出ていこうとするグループの一人に教室の照明を消される
挑発	ホーム	電車のホームで列に並んで待っている時，一人の若者に列に割り込まれる
疎外	発表	授業でプレゼンテーションをしている時，一人の熱心な学生に強く批判される

方法

1．想定場面の作成過程

心理学専攻の大学生 4 名，臨床心理学専攻 2 名の協力を得て，「対人場面で嫌がらせをされたと思ったり，嫌われたと思ったりする場面」を自由に想起させた。その際，先行研究（Epps & Kendall, 1995; Homant & Kennedy, 2003; Tremblay & Belchevski, 2004; Combs et al., 2007）を参考にいくつかの場面を例示した。その結果，27 場面を収集した。

得られた場面から敵意帰属や嫌悪判断が適度に生じやすいと考えられるものを 11 場面選択し，前後の文脈を追加して一つの場面としてまとまりをもつように成形した。それらに意図（「わざと」と「嫌がらせ」）の認知を問う質問項目（「1．全くそう思わない」から「6．きっとそうだと思う」の 6 段階評定），ならびに，情緒反応（「怒り」と「嫌悪感」）の程度を問う質問項目（「1．全く感じない」から「7．非常に強く感じる」の 7 段階評定）を付したものを心理学と臨床心理学を専攻する大学院生 50 名に対し実施した。[iii]

各項目の平均値を算出したところ，意図を問う 2 項目では「嫌がらせ」が「わざと」よりも全般的に低い値にとどまる傾向がみられた。これは，前者の表現がより否定的な意図を強く表現するものであるため，低めに評定される傾向があったものと思われた。「わざと」の平均値に着目すると，1 場面が突出して高い値（3.63）を示しており，それ以外では相対的に高い値（2.37~2.71）を示す 5 つの場面と相対的に低い値（2.14~1.52）を示す 5 場面に分かれる傾向がみられた。場面想定法に用いるためにはある程度意図的であるとみなしうることが適切であると考えられたため，相対的に高い平均値を示した 6 場面を採用することとした。なお，相対的に低い平均値を示した 5 場面のうち 1 場面のみ内容面から追加で採用することとした。

得られた 7 場面の内容を，自身の行動に対する実際的な阻害が生

i 従来用いられてきた「帰属（attribution）」の概念を用いると，対人疎外場面における嫌悪的な意図を理解するに際して混乱が生じるものと思われる。原因帰属の観点からは，その出来事の原因は「（嫌われている）自分」に位置づけられてしまうからである。本研究では，あくまで相手の意図によって生じたと認知する側面を重視している。そこで，「帰属」ではなく「判断（interpretation）」を用いることとした。

ii 本稿は，相澤（2010）の研究にいたる予備的な調査研究を報告するものである。

iii この手続きの中で，「相手に好意を持たれていると感じたり，親切にされていると感じる場面」も収集整理し調査に使用しているが，本稿では省略する。

じている場面であるか，他者からの否定的な評価が問題となっている場面であるかという観点から分類し，4 場面を対人挑発場面，3 場面を対人疎外場面とした（Table 1）。

2．質問紙の構成

上記の手続きで得られた 7 場面に対し，意図を問う質問項目（「その人はわざと（意図的に）そのようなことをしたと思いますか」について「1. 全くそう思わない」から「6. きっとそうだと思う」の 6 段階評定）と，情緒反応としての怒り（「その時あなたはどの程度怒りの気持ちを感じますか」に対し「1. 全く感じない」から「7. 非常に強く感じる」の 7 段階評定）と嫌悪（「その時あなたはどの程度嫌な気持ちになりますか」に対し同じ 7 段階評定）を問う質問項目を付加したものを用いた。意図としての「嫌がらせ」は，予備調査で評定が低い値にとどまる傾向がみられたので，今回の調査では用いなかった。また，場面の内容が否定的なものが多いことによる調査協力者の心理的負担を考慮して緩衝場面を追加した。

また，今回構成された場面が対人挑発場面と対人疎外場面として的確であるかどうかは，その場面における上記の質問項目に対する評定が調査協力者の敵意帰属と嫌悪判断の傾向，ならびに，情緒反応傾向を妥当なかたちで反映しているかどうかに示されるものと考えられた。そこで，以下の尺度をその妥当性の検討を目的に用いた。

まず，調査協力者の一般的な性格傾向との関連を検討するために，和田（1996）による Big Five 尺度を用いた。この尺度は，性格特性を表現する 60 個の形容詞からなる尺度（「1. 全くあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」の 7 段階評定）であり，繰り返しの調査により 5 因子構造（外向性，情緒不安定性，開放性，誠実性，調和性）が確認されている。また，新性格検査（柳井・柏木・国生，1987）との間で併存的妥当性が確認されている。形容詞を用いているため回答に時間がかからず，かつ，構造が安定しやすいとされている。

そのほか，特に対人挑発場面と対人疎外場面のそれぞれの妥当性を検討するために以下の尺度を用いた。まず，対人挑発場面に関しては日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤・曽我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井，1999：BAQ）を用いた。従来の敵意帰属バイアスの研究は，敵意帰属が高まるほど報復的攻撃的行動が増加することを支持している。したがって，対人挑発場面における各項目得点は，BAQ と正の相関関係にあることが仮定される。対人疎外場面については菅原（1984）による自意識尺度日本語版を用いた。対人疎外場面についてはいまだ先行知見がなく，関連する特性や要因の特定が困難である。ただし，嫌悪判断には明らかに他者の前で自己を強く意識することが含まれており，自意識特性の中の公的自意識と正の相関関係が予測される。

なお，以上の調査を一度に実施すると，調査協力者に過度の負担を与えることが懸念された。そこで下記の 2 種類の調査質問紙を用いて，2 度の調査に分けて実施することとした。

調査質問紙 A：場面想定法・自己概念の明確性評定法・Big Five 尺度（通常の自己評定と他者から見た自己の評定の 2 種類）[iv]

調査質問紙 B：場面想定法・自意識尺度・BAQ

3．調査協力者と調査期間

調査協力者は，全体で 4 年制大学大学生男女 296 名（平均年齢 20.42 歳，男性 66 女性 230）であった。そのうち質問紙 A への協力者は大学生男女 211 名（平均年齢 20.49 歳，男性 66 女性 145），質問紙 B への協力者は大学生女子85名（平均年齢 20.26）であった。大学の講義室内にて質問紙を配布し，その場で回収した。調査期間は2008 年 12 月から 2009 年 1 月にかけてであった。

結果と考察

1．場面想定法による各項目得点の平均値と各場面の性質

質問紙Aと質問紙Bの回答者全員のデータをもとに，場面想定法における各項目得点の平均値を算出した（Figure 1）。その結果，意図得点の平均値をみると，他より明らかに高い値を示す場面（「ホーム」）と低い値を示す場面（「宣伝」）がみられた。前者では，4（「その可能性は十分あると思う」）以上の評定をおこなった回答者が 6 割近くに上っていた。回答者の多くが登場人物の行為を意図的なものとみなしたことになる。この点については、「並んでいるホームの列に割り込む」という行為が，敵意的であるかどうかは別として意図しなければ生じえない行為とみなされた可能性が高い。敵意帰属の個人差を弁別できる想定場面としては,相手の意図が一定程度あいまいであることが求められる。したがって，このように意図が

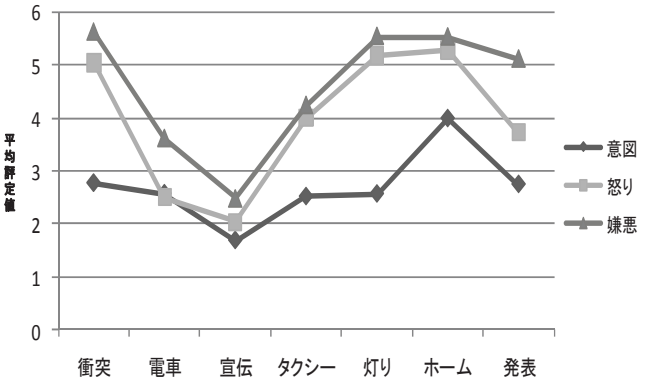

Figure 1 場面想定法による各項目得点の平均値

明白すぎる場面はふさわしくないといえる。

また，後者では，回答者のほぼ 9 割が 2（「ほとんどそう思わない」）以下の評定をおこなっていた。この場面に登場する人物の行為が意図的なものではないとみなされたことが分かる。「宣伝用のティッシュ・ペーパーを渡さない」という行為は，単なる偶然やタイミングの問題としてしかあつかわれなかった可能性が考えられる。意図的とみなされる度合いが極端に低いものも，場面想定法に用いる場面としてはふさわしくない。以上のことからこれらの 2 場面は以後の分析から除外した。

対人挑発場面にあたる 3 場面では，怒り項目得点も嫌悪項目得点もともに高い値となった。怒りと嫌悪（今回の調査では「嫌な気持ち」）という情緒反応を考慮すると，怒りの感情は嫌な気持ちの一種であると考えられる。したがって，上記の特徴は，怒りと嫌悪とい

iv 本稿では，自己概念の明確性評定法，ならびに，Big Five 尺度の他者から見た自己の評定については省略した。

う別々の情緒反応が表現されているとするよりも，怒りが主な情緒反応であって，それに従って嫌悪も高く評定された可能性が考えられる。対人挑発場面が報復的攻撃に結びつきやすいことを考慮すると，上記の3場面における情緒反応得点の特徴は妥当なものであると考えられた。

一方，対人疎外場面の2場面の特徴をみると，情緒反応得点の高低にずれはあるものの，ともに嫌悪項目得点のほうが怒り得点よりも高い値となっていた。このことは，これらの場面が怒りよりも嫌悪の情緒反応が主流であることを示唆している。対人疎外場面は，具体的な行為の阻害よりも他者からの評価が問題となる場面である。したがって，怒りよりも嫌悪が情緒反応の主流となることは妥当なことであると考えられる。なお，「発表」は，対人挑発場面と同程度の怒り項目得点の平均値がみられる。このことは，この場面がある程度対人挑発場面としての特徴も兼ね備えていることを示唆しているものと思われる。

次に，3 つの対人挑発場面についてそれぞれの意図項目得点間，怒り項目得点間，嫌悪項目得点間の相関係数を算出したところ，意図項目得点で.249~.394，怒り項目得点間で.317~.536，嫌悪項目得点間で.217~.449 の弱い，ないしは，中程度の正の相関を示す値が得られた。このことにより，各調査協力者の3場面の意図項目得点平均値を敵意帰属得点，怒り項目得点平均値を怒り得点，嫌悪項目得点の平均値を嫌悪得点として算出した。

一方で，2 つの対人疎外場面についてもそれぞれの項目得点間で相関係数を算出したが，意図項目得点間では.144，怒り項目得点間では.221，嫌悪項目得点間では.159 とほとんど無相関を示唆する値にとどまった。以上の点は，同じ対人疎外場面であっても各行為に対する反応が異なった意味を有する可能性を示唆している。そこで，対人疎外場面については，項目得点間で平均値を算出することなく，「電車」と「発表」の項目得点を個別に検討することとした。

2．他の尺度との相関について

質問紙Aに回答した211名の調査協力者のデータを用いて，上記の場面想定法各得点と Big Five 尺度の下位尺度との相関係数を算出した（Table 2）。対人挑発場面については，敵意帰属得点と Big Five 下位尺度得点とはほとんど有意な相関を示さなかった。これは，敵意帰属が場面に対する反応としての性質を持っており，一般的な特性としての安定性を重視する Big Five 尺度による特定とは直接的な関連が成立しにくかったためではないかと思われる。一方，怒り得点と嫌悪得点の両者で，Big Five の情緒不安定性との間に弱い正の相関，調和性との間に弱い負の相関を示唆する値が得られた。怒りと嫌悪がともに出来事に対する情緒反応であることを考慮すると，情緒が不安定な人ほど，他者から何らかの危害を加えられるような出来事に遭遇した場合，否定的な感情を体験することは十分に考えられることである。また，調和性については，他者との関係性を重視する傾向は，対人関係における怒りや嫌悪の体験そのもの，あるいは，その表出を抑制する傾向にあるため，このような結果が得られたものと考えられる。

Table 2 場面想定法各得点とBig Five尺度の相関

		Big Five尺度				
		外向性	情緒不安定性	開放性	誠実性	調和性
対人挑発場面	敵意帰属	.104	.093	.047	.041	−.049
	怒り	−.132	.182 **	−.027	.057	−.281 **
	嫌悪	−.153 *	.291 **	−.012	−.018	−.208 **
対人疎外場面	意図（電車）	−.092	.202 **	−.026	.061	−.027
	怒り（電車）	−.132	.236 **	−.035	.039	−.216 **
	嫌悪（電車）	−.045	.226 **	−.049	.002	−.033
	意図（発表）	−.010	.091	−.002	.113	.080
	怒り（発表）	−.015	.115	.130	.034	−.054
	嫌悪（発表）	−.046	.136 *	.035	.132	−.064

*p<.05 **p<.01

Table 3 場面想定法各得点とBAQ，自意識尺度との相関

		BAQ				自意識	
		身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃	公的自意識	私的自意識
対人挑発場面	敵意帰属	.344 **	.273 *	.409 **	.216 *	.286 **	−.053
	怒り	.310 **	.241 *	.149	.111	.137	−.081
	嫌悪	.341 **	.151	.246 *	.003	.173	−.216 *
対人疎外場面	意図（電車）	.011	.099	.214 *	−.067	.311 **	−.075
	怒り（電車）	.107	.207	.139	−.017	.146	−.062
	嫌悪（電車）	.006	.101	.136	−.082	.248 *	−.137
	意図（発表）	.144	.151	.085	.120	.118	−.033
	怒り（発表）	.227 *	.136	.130	.236 *	.166	−.172
	嫌悪（発表）	.188	.060	.238 *	−.049	.220 *	−.211

一方，対人疎外場面については，4つの場面で結果に大きな違いがみられた。「電車」の場面については，意図項目得点，怒り項目得点，嫌悪項目得点のいずれにおいても Big Five の情緒不安定性との間に弱いながらも正の相関がみられた。情緒反応項目については前述と同様と考えられるが，意図項目得点においても関連が見出された点に対人挑発場面との違いがみられる。これは，敵意帰属に比して，対人疎外場面における嫌悪判断は，場面に対する反応としてだけではなく，予期的な不安が重要な要因となっているためであると考えられる。一方で，「発表」ではいずれの項目得点も Big Five 尺度との間に有意な相関を示さなかった。したがって，この場面が適切に意義のある項目反応を引き出しているかどうかについてはやや疑問が残る。

次に，質問紙 B に対し回答が得られた調査協力者 85 名のデータに基づき，場面想定法による各得点と BAQ 下位尺度，自意識尺度との間の相関係数を算出した（Table 3）。その結果，敵意帰属得点と BAQ の身体的攻撃，短気，敵意，言語的攻撃，ならびに，自意識尺度の公的自意識との間に弱い，ないしは，中程度の正の相関を得た。また，怒り得点では，BAQ の身体的攻撃，短気との間で弱い相関がみられ，嫌悪得点については，BAQ の身体的攻撃と敵意との間で弱い相関，あと，私的自意識との間には弱いながらも負の相関がみられた。以上のように，対人挑発場面の各得点は，おもに BAQ の各尺度との間に有意な正の相関がみられた。この結果は，

敵意帰属研究の先行知見に一致するものであり，対人挑発場面が適切に構成されていることを示唆している。言語的攻撃ではほとんど無相関に近いしか得られなかったが，これはこの下位尺度が主張性や積極性に近い内容であるためと考えられる。

一方，予測とは異なり敵意帰属と公的自意識の間で弱いながらも正の相関を示唆する値が得られた。敵意帰属は，他者から何らかの阻害を被る対人挑発場面において，その出来事を他者の意図に帰属する傾向である。したがって，他者の目に見える自己の側面に意識関心を向ける公的自意識とは直接的な関係が想定しにくい。ただし，対人挑発場面とはいえ，周囲の人の目と全く関係ないわけではない。周囲の人の目を気にする人は，他者の目に触れることに損害の程度を大きく感じ，そのことが敵意帰属の高まりに結びついているのかもしれない。

一方，対人疎外場面については，ここでも 2 つの場面で結果が大きく異なった。「電車」では，意図項目得点と公的自意識，BAQ の敵意で弱い程度の正の相関がみられた。また，嫌悪項目得点で，公的自意識との間に正の相関を示唆する結果を得た。一方，「発表」の意図項目得点はいずれの尺度とも有意な相関を示さなかった。怒り項目得点で，BAQ の身体的攻撃，言語的攻撃との間に弱い正の相関，嫌悪項目得点で，BAQ の敵意と公的自意識との間に弱い正の相関がみられた。

「電車」場面については，特に公的自意識との間で有意な正の相関が得られたといえる。対人疎外場面に接して嫌悪判断傾向が高い人は，周囲の目に映る自分を気にする傾向が高くなりやすいものと思われる。したがって，上記の相関関係は，この場面が対人疎外場面として適切であることを示唆している。

一方で，予測とは異なり，意図項目得点と BAQ の敵意との間に正の相関がみられた。嫌悪判断は，対人疎外場面に接して他者に嫌われたと体験しやすい傾向である。一方，BAQ の敵意は，他者から狙われたり危害をくわえられたりすることを危惧しやすい特性を指す。両者は一見大きく異なるように見えるが，広義には他者から否定的に評価されるという点で共通している。そのために一定程度の正の相関が検出されたものと考えられる。なお，この結果は，前述の敵意帰属と公的自意識の関連と結びつく可能性がある。敵意帰属と嫌悪判断，敵意，ならびに，公的自意識に共通する何らかの要因があるのかもしれない。この点については今後の詳細な検討が必要である。

一方で，「発表」については，意図項目得点はほとんど有意な相関を示さなかった。したがって，対人疎外場面としてはふさわしくない可能性が示唆された。その他の相関に目を向けてみると，怒り項目得点が BAQ の身体的攻撃と言語的攻撃の両者と相関を示している。言語的攻撃の結果については，この場面の設定（授業のプレゼンテーションを批判される）が関連しているものと思われる。身体的攻撃については，前述したこの場面の怒り項目得点の平均値の高さを考慮すると，この場面が対人挑発場面として性質をもつことを示唆するものと考えられる。嫌悪項目得点と BAQ の敵意の間に正の相関が見られた点も同様のことを示唆している。しかし，嫌悪項目得点と公的自意識との間に正の相関がみられた点には，やはり対人疎外場面としての性質も有していることが読み取れる。以上のような場面の複雑さが，結果として意図項目得点と他の尺度との関連を弱めた可能性が示唆される。

以上のように，場面想定法による各得点と妥当性尺度との相関関係を検討したところ，対人挑発場面の各得点については，特に BAQ との相関において予想通りの結果が得られた。このことは，3 つの場面が対人挑発場面として適切なものであることを示唆している。一方，対人疎外場面については，場面ごとに検討をおこなったところ，「電車」については自意識尺度との相関において妥当な結果が得られた。このことは，「電車」の場面が対人疎外場面として適切なものであることを示している。一方，「発表」では予想通りの相関はみられず，むしろ，怒り項目得点や嫌悪項目得点では BAQ との間に部分的な正の相関がみられた。このことは，この場面が対人挑発場面としての性質も併せ持つなどの複雑さがあるため，対人疎外場面として適切に嫌悪判断傾向を引き出せなかったものと考えられる。

まとめ

本研究では，Dodge ら（Dodge, 1980; Crick & Dodge, 1994）による敵意帰属バイアス研究の対人挑発場面と敵意帰属の概念に対比して，なんらかのかたちで他者との結びつきが断たれる場面を対人疎外場面と呼び，その際に「他者に嫌われている」，ないしは，「他者に避けられている」と認知する傾向を嫌悪判断と呼んだ。そして，敵意帰属と嫌悪判断をそれぞれ引き出す場面測定法を作成するために，対人挑発場面と対人疎外場面を作成する予備的研究をおこなった。

大学生，大学院生とのブレインストーミングから対人葛藤場面として 27 場面を収集し，内容上の検討を経て 11 場面に整理した。それらに相手の意図に関する質問項目と情緒反応に関する質問項目を付したものを大学院生 50 名に実施し，意図に関する質問項目の平均値の高いものから 6 場面，内容面から妥当と考えられる 1 場面の合計 7 場面を最終的に採用した。

得られた場面に再度，意図に関する質問項目と情緒反応としての怒りと嫌悪感に関する質問項目を付したものを，妥当性検討尺度としての Big Five 尺度，BAQ，自意識尺度とともに一般大学生男女に実施した。各場面の意図項目得点平均値を検討したところ，対人挑発場面のうち 1 場面（「ホーム」）が極端に高い値を示したこと，対人疎外場面のうち 1 場面（「宣伝」）は極端に低い値を示したことからそれぞれ除外した。情緒反応得点の分布からは，残りの対人挑発場面 3 場面，対人疎外場面 2 場面がそれぞれ妥当である可能性が示唆された。

妥当性尺度との相関係数を検討したところ，対人挑発場面については特に BAQ との間で妥当な結果が得られた。このことから，対人挑発場面は適切に作成されていることが示唆された。一方，対人疎外場面については，2 場面の各項目得点間の相関係数が低いため，場面ごとの項目得点と妥当性尺度との関連を検討した。その結果，「電車」では自意識尺度との間に妥当な相関が得られたが，「発表」ではむしろ情緒的反応の項目得点で BAQ との間に有意な正の相関が得られる結果となった。したがって，「電車」は対人疎外場面として適切に作成されていることが示唆されたが，「発表」は，対人挑発場面としての性質を持つなどの複雑さのため，適切に嫌悪判断を引き出しえていないことが示された。

以上の結果は，一定程度対人挑発場面と弁別しうるものとして対人疎外場面が構成しうることを示唆している。しかしながら，最終的に1場面となったことは，対人疎外場面の作成の困難さが示されている。この点には両者の性質の違いが関連しているものと考えられる。対人挑発場面は，自身の行動に対する何らかの実際的な阻害がもたらされる場面である。したがって，よほど突飛なものでない限り，何らかの阻害を構成し，そのことに対する認知と情緒反応を問えば対人挑発場面の作成は困難ではないと思われる。それに対して，対人疎外場面はそのような実際的な阻害は必ずしもともなわない。「なんらかのかたちで他者との結びつきが断たれる」という要素が重要となるが，どのような出来事がそのように認知されるかにはかなり不確定な要素がかかわってくるものと思われる。一見すると些細な出来事でも相手や場所によっては嫌悪判断を引き出す可能性があり，また，かなり負担の大きい出来事であっても条件が異なれば嫌悪判断を引き出すことはない。そのような両場面の性質の違いが，場面構成の困難さの違いにあらわれたものと考えられる。

また，質問項目に用いた表現自体にも問題があった可能性が考えられる。今回意図を問う質問項目に「わざと（意図的に）」という言葉を用いた。この質問は，単に相手の行為が意図的なものであるかどうかを問うているにすぎず，必ずしもその背後に敵意や嫌悪などの情緒的要素を含むとは限らない。したがって，相手の行為が能動的なものであるとみなされる場合には，高得点の評定に結びついた可能性が考えられる。その中でも，実際的な危害が明らかな対人挑発場面では，敵意という要素が必然的に伴いやすかったのかもしれない。それに対して，そのような要素を必ずしも持たない対人疎外場面においては，評定に様々な要素が混入し嫌悪判断としての指標の意義を希釈したのかもしれない。その結果，妥当性尺度との相関係数が全体的に低められた可能性が考えられる。

以上の問題をふまえると，今後の研究としては第一により精緻な手続きを通じて対人疎外場面を再検討する必要があるものと思われる。どのような相手によるどのような行動が嫌悪判断を引き出しうるのか，調査協力者の年齢段階や日常生活を考慮して場面を再構成し，それらの場面に対する調査協力者の反応を広範囲に収集分析することを通じて，適切な対人疎外場面を検討することが求められる。また，意図を問う質問項目に関しては，より明確で限定的な表現を用いることが求められる。単に「わざと（意図的に）」かどうかを問うだけでなく，敵意的な意図でなされたものであるのかどうか，ないしは，嫌悪によってそのような行動がなされたかどうかが問われていることが調査協力者に明確に伝わるような表現が必要になってくると考えられる。以上のような修正のもと，今後も継続的に研究をおこなう必要があるものと思われる。

＜引用文献一覧＞

相澤直樹 (2010). 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒的反応について：他者の意図としての敵意と嫌悪に注目して 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **3**. 1-10.

Akhtar, N. & Bradley, E.J. (1991). Social information processing deficits of aggressive children: Present findings and implications for social skills training. *Clinical Psychology Review*, **11**, 621-644.

安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（BAQ）の作成と妥当性，信頼性の検討　心理学研究, **70**,384-392.

Combs, D.R., Penn, D.L., Wicher, M., & Waldheter, E. (2007). The ambiguous intenstions hostility questionnaire(AIHQ): A new measure for evaluating hostile social-cognitive biases in paranoia. *Cognitive Neuropsychiatry*, **12**, 128-143.

Crick, N.R. & Dodge, K.A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanism in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.

Dodge, K.A. (1980). Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, **51**, 162-170.

Downey, G. & Feldman, S.I. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1327-1343.

Epps, J. & Kendall, P.C. (1995). Hostile attributional bias in adults. *Cognitive Therapy and Research*, **19**, 159-178.

Homant, R. & Kennedy, D.B. (2003). Hostile attribution in perceived justification of workplace aggression. *Psychological Reports*, **92**, 185-194.

Orobio de Castro, B., Veerman, J.W., Koops, W., Bosch, J.D., & Monshouwer, H.J. (2002). Hostile attribution of intent and aggressive behavior: A meta-analysis. *Child Development*, **73**, 916-934.

Romero-Canyas, R., Anderson, V.T., Reddy, K.S., & Downey, G. (2009). Rejection sensitivity. In M.R. Leary & R.H. Hoyle(Eds.), *Handbook of Individual Differences in Social Behavior*. NY: Guirford Press, pp.466-479.

菅原健介 (1984). 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み　心理学研究, 55, 184-188.

Tremblay, P.F. & Belchevski, M. (2004). Did the instigator intend to provoke? A key moderator in the relation between trait aggression and aggressive behavior. *Aggressive Behavior*, **30**, 409-424.

和田さゆり(1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.

柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子(1987). プロマックス回転法による新性格検査の作成について-1-心理学研究,58,158-165.